

センター通信

Japan Review 三〇号をむかえて（その二）

ジョン・グリーン

Japan Review（以下、JR）三〇号は年度内に出る。これは記念すべき節目である。三〇号は通常号ではなく、日本の「世俗」をテーマとする別冊の特集号として組んでいる。欧米の学者は近年「世俗とは何か」を盛んに議論しているが、議論の成果を近現代の日本に当てはめる試みはほとんどされてこなかった。Formations of the secular in Japan と題するこの特集は、その穴を少しでも埋める狙いをもつ。執筆陣はアメリカをはじめドイツ、オランダ、フランス、イタリア、ノルウェイ、オーストラリア、イギリスそして日本で活

躍中の研究者から構成されている。JRがこのような特集企画を開始したのは最近のことである。一弾目は、二〇一三年に刊行した春画の特集 *Shunga: sex and humor in Japanese art and literature* だった。かなりの好評をえたため継続的に出したと考えた。特集は二年に一度のペースで刊行するが、第三弾目の下準備にはもうすでに入っている。それは欧米で今話題となっている *War and tourism* がテーマで、刊行は二〇一八年に予定している。

学術雑誌の編集長の責任は重い。責任が多くある中で、その雑誌を常に進化させ、より広く読まれ、高く評価されるものにしていくのが最重要であろう。これら特集号は、筆者が編集長になってから導入した一つの「進化」である。JRの過去を振り返って見れば、一九九〇年の創刊号以来見聞違え

るほど進化してきたことが分かる。時には、その進化が大胆な「飛躍」となってあらわれることもあった。編集長の交代が主な契機であった。鈴木貞美氏（日文研の名誉教授）が一九九八年に編集長になったことでJRが方向転換をなしたことがまず注目に値する。それまでは日本と一切関係のない論文さえ掲載され、研究論文の他にも“lectures”, “team research projects”, “notes”, “discussions”などなどのコーナーも設け、アイデンティティーの判然としない「紀要」であった。鈴木氏のおかげでJRが日本研究の学術雑誌として初めて「一人前」になったと言っても過言ではない。しっかりとした査読制度が導入されたのも、鈴木時代である。

このようにして所内の紀要から国際的に認識され始める学術雑誌へと脱皮していったJRだが、その新しい方向を新たな自信をもって歩みだしたのは、二〇〇一年に編集長に就任したジム・バクスター氏である。（元日文研教授の）バクスター氏の遺産は大きい。一つは *Japan Review* is open to all authors という文言を氏が「執筆要項」に初めて挿入して明記したように、投稿資格は、もはや所内の先生方及び外国人研究員に限定しない、日本研究者ならだれにでも門戸を開く、という方向性である。さらに、査読はこれまで所内の先生方

を中心に行ってきたが、バクスター氏は所外へも適切な人材を探し査読を依頼することにした。そして当時は雑誌の体裁、文体上の乱れが色々指摘されていたのでその統一をはかったのもバクスター氏である。 *Chicago Manual of Style* をベースとした *Monumenta Nipponica* の文体をJRで活躍したこともまた大いに評価すべきである。

筆者は編集長に就任したのが二〇〇九年だが、鈴木・バクスター両氏の業績を踏まえながら微調整を何度か施してきた。以下それを簡単に紹介するが、なかでも所内の一部から強い抵抗に出会った微調整もあったことを記しておきたい。いずれにせよ、筆者の目的は一貫してJRをより良い雑誌、一流と認められる雑誌にするのが狙いであり続けてきた。まず手をつけたのは、見た目、体裁である。長年利用された薄緑の装丁をやめ、日文研図書館のデータベースから魅力的なイメージを選んで、それを表紙に貼り、衣替えを実現した。光沢のある紙をやめ、より読みやすい紙にし、フォントも変えた。そして文末注を脚注にした。他に、和文要旨を雑誌から外し、ウェブサイトに移した。以上のような体裁問題と関係のないところでも、JRの進化をあえて推し進めてきた。以下簡単に述べてみよう。

組織面では、存在していなかった編集小委員会を立ち上げた。必要に応じてJ Rの編集方針等について委員に相談することとした。広報面ではJ RをJSTORに登録した。JSTORは人文、社会などの学術雑誌のバックナンバーを、電子的に保存するデジタルアーカイブだが、J Rが広く認識されるのには登録が欠かせないものであった。内容面では、書評欄を導入して世界中のエクスパートに話題の日本研究書にメスを入れてもらうこととした。「研究ノート」も、貴重な資料の「英訳」もまた新しい企画である。最後に冒頭で紹介したように特集号も二〇一三年の導入であった。これで決して満足

できるわけではない。課題は多く残っている。投稿原稿の数が不足気味なので募集に更なる力を入れ、工夫をする必要がある。募集のためにも、Thomson ReutersのArts and Humanities Citation Indexにも、ScopusにもJ Rを載せてもらうことを狙っている。商業出版と何らかのタイアップができないかの検討をすることも大事かも知れない。J Rは日文研が英語圏に向ける「顔」でもあるため、常によりいいものにしていく責任を編集長の筆者は痛感している。

(国際日本文化研究センター教授)